

鋼鉄の博愛主義者

ことり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トニー・スタークはゆっくり眠っていた。そして目覚めると、なぜか草原にいた。

Fate／Grand Orderとアイアンマンのクロスオーバーです！

この作品は、MCUシリーズのネタバレを含みます。

この作品は、作者がエンドゲームを見て興奮のあまり書き綴ったものです。

鋼鉄の博愛主義者は4〜5話で完結する予定ですので、どうぞよろしくお願ひします。

目次

鋼鉄の博愛主義者	1
鋼鉄の博愛主義者	2
鋼鉄の博愛主義者	3
鋼鉄の博愛主義者	4
	28

鋼鉄の博愛主義者——1

「……………て」

ペチペチと頬が叩かれる感触がする。それに、子供の声も。瞳は閉じているがまぶたの裏が明るいということは、もう朝か。

起きなければならぬのだが、どうにも体が起き上がろうとしてくれない。起こしに来てくれたモーガンには悪いが、もう少しだけ眠らせてもらおう。

「ごめんなモーガン。パパもうちよつとだけ寝てたい」

「どういうこと？ わたしモーガンじゃないよ？ それにおじちゃんわたしのパパじゃないし」

なるほど考えたな。普段の起こし方じゃ起こさないと分かったら、手を変えて来たか。

流石は天才だ。

だが、本当に悪いんだがとても眠たい。モーガンは部屋に帰らせて、もしくははペツパーを呼んでもう一眠りさせてもらおう。

「そんな事を言うのは、この口……………誰だ君は？」

モーガンを帰らせるために軽く体を起こして目を開いたのだが、口をついてでたのはその言葉だった。目の前にいたのは、モーガンではなく見知らぬヨーロツパ系の黒髪の少女。僕は彼女は誰だと思ひながら視界の端に写りこんでいた緑色に注意を向け、呆然とした。

一体、ここはどこだ？

なぜ僕は僕の部屋ではなく、草原で目が覚めたのだ。

明らかな異常事態に、無理をして急いで立ち上がる。そして胸のリアクターに触れるとすぐにナノマシンが展開していき、数秒後には僕の体はスーツに覆われていた。

「F・R・I・D・A・Y。」

《はい、ボス》

「偵察機を出す。地形からこの場所の特定をしてくれ」

《了解しました》

「出来るだけ、早く」

《当たり前です。私を誰だど？》

スーツの背面部から、複数の小さいロボットが飛び出す。そのロボット達は青い軌跡を作りながら四方八方へと飛んでいった。

全く、F・R・I・D・A・Y。め。この尊大な態度は一体誰に似たのか……少なく

とも僕はこのような性格になる様には作っていないが。

さて、なぜ目が覚めたら草原にいたのかだが、全く持つて予想はついていない。とつさにF・R・Y・D・A・Yに指示を出したはいいが、正直に言うとは混乱は収まつていない。だが、とりあえずこの場所についての考察に対して、地形からのアプローチは開始した。次は、人からのアプローチを開始しよう。

僕は頭部の装甲を解き、先程から呆然としている少女に向かい話しかけた。なるべく、落ち着いている様子で。

「お嬢ちゃん、名前は？」

「なにあのとびでたの！ 鳥さんかなあ？ それとおじさんのその、赤いのなあに？ おじさんなんでここでおひるねしてたの？ あとおじさんだあれ？」

「待て待て、まずは僕の質問に答えてからだ。君の質問には、後で答えてあげるから」

すると少女はこくと頷いた。中々に聞き分けの良い子だ。僕が家に帰った後でこの子に何かサプライズをしてあげても良いかもしれない。

「私はね、えつとね、アーリンって言うの！」

「そうか、それじゃあアーリン。ここが何処か、教えてくれないか？」

「んつとね、ここはね」

《ボス、場所の特定が完了しました。地形情報を既存の地図と照らし合わせた結果、ここ

はほぼ間違いなく……》

やけに早いな。この数秒の間で特定できるなど、予想だにしていなかった。この速度で判明するという事は、地球上の場所なのだろう。まあ、それはF. R. Y. D. A. Y. が起動した時点で分かっていた事だが……

とりあえず、想定しうる限りの最悪の事態でなくて良かった。もしここが地球外の何処かなのなら、ソーや傲慢な魔術師に頼らなくてはならなくなってしまうていた。

頭がズキリと痛んむ。なぜ僕は、あの魔術師が宇宙から地球に帰ることができると確信している。

少なくとも、地球上ならば穴を空けて移動できるといふ事を見たからか？

いや、違う。僕はこの目で奴がタイタンの惑星から帰ってくる所を見た。それは……何処で……

頭を振って、強引にその考えを中断する。ともかく今は目先の問題だ。F. R. Y. D. A. Y. に、早く答えを言うように指示を出す。

F. R. Y. D. A. Y. の答えは、アーリンの答えと同時に返ってきた。

「ニューヨークの北のほう！」

《ニューヨーク州北部です》

なるほどニューヨーク州北部か。それは良かった。それなら……

僕は頭部の装甲を再び展開させると、追加の偵察機を出した。

「F. R. Y. D. A. Y.、ここからアベンジャーズ本部までの道のりを出してくれ。念のため追加の偵察機を出し」

《存在しません》

「は？」

まで、今、F. R. Y. D. A. Y. はなんと言った？ アベンジャーズ本部が、存在しないだと？

ありえない。

確かに破壊されはしたが、それでも本部の跡地らしき場所はあるはずだ。僕の聞き方が悪かったか？

「F. R. Y. D. A. Y.、ならアベンジャーズ本部跡地までの道のりを」

《繰り返し言いますが、存在しません》

ねーねー、誰とお話してるの？ というアーリンを手で制して、F. R. Y. D. A. Y. の返答について考える。

アベンジャーズ本部跡地すらないという事は、そもそもニューヨーク州北部にアベンジャーズ本部が建てられていないという事だ。だが、そんな筈はない。なぜなら、自身が建てたのだから。

となると、残る可能性は……

「なあ、アーリン。今が何年か、分かるかな？」

「なんねん？ わかんない！」

「F. R. Y. D. A. Y.、今このタイミングでの、年を調べてくれ。僕の年齢じゃ無いぞ？ これも出来るだけ早くだが……この場所を導き出した時並みの速さは求めていない」

《了解ですボス。なる早ですね》

誰だF. R. Y. D. A. Y. にこんな言葉を教えた奴は。

《大船に乗ったつもりで待っていてください》

追加の偵察機も飛んでいき、残るは僕とアーリンだけになった。

アーリンは僕の前でびよんびよんと跳ねながら注意を引こうとしている。

「そうだ！ おじちゃん寝る場所あるの？」

なんの脈絡もなく、アーリンはそう聞いてきた。寝る場所、か。この時代が僕が生まれ生きた時代なのならあるが、そうでないなら無い。

まあそれならそれで野宿すればいいだけなのだが。

「寝る場所か。まあ、無いと言ったらないし、あると言えばある」

「……………ええと、じゃあないの？」

アーリンは少し考えた後に結論を出した。見た感じの年はモーガンと同年くらいにも関わらず、しつかりした子だな。

「ああ、そうだな。無いよ」

「なら、わたしの家に来て！ じゃないと、さーぐあんとに殺されちゃうー！」

サーヴァント、という事は使用人か。一体誰のだ。それに殺されるとは、中々物騒な話じゃないか。

「あー、アーリン。そのサーヴァントって言うのは？」

「えっとね、さーぐあんとっていうのはね、すっごい強くて、怖い存在なんだってお母さんが言ってた！ 夜に町の外にでたら、さーぐあんとに殺されるぞって」

なるほど、つまりは親が子を戒める為に使う方便のようなものか。子供が怯えるには十分すぎる存在だな。

空を見てみると、太陽が既に赤くなり始めている。僕は今の時間帯を朝だと思っていたが、どうやら夕方だったらしい。それでアーリンはその事を思い出したのか。

「そろそろ帰らなきゃ、お空が暗くなって夜になっちゃうの！ だから、おじちゃんもうちで隠れないと！ それに、おじちゃんの色々も気になるし……だから、早く行こー！」

どうやらアーリンの中では僕が彼女の家に泊まる事は確定しているらしい。どう頑張っても親御さんに許可がもらえる未来が見えないが……

「ほらー！ 急がなくて夜になっちゃうよー」

アーリンが手を僕の手を引いてくる。僕はアーリンに付いていき、彼女の街で色々情報を得ることにした。

今決めた。

そうすると、歩くよりも断然飛んだ方が早い。

「アーリン、こっちにおいで」

とてとてと寄ってきたアーリンを抱き上げると、おんぶをするように背中に乗せた。

「なにをするの？」

「ちよつとだけ空を飛ぶだけだから安心してくれ」

その後ナノマシーンを展開してアーリンが落ちないように固定した。そして、生身の人間に害がない程度のスピードで飛び始めると、僕の背中の上から歓声のような悲鳴のような声が響く。

アーリンの住む街がどこにあるかは分からないが、子供が徒歩で来ることが出来る距離だ。そう遠くはないだろう。

それにしても、今さつき会ったばかりのかっこいいスーツを着た大人を家に呼び込むとは、この少女の安全管理が心配になってきた。

偏に彼女自身の優しさかもしれないが、それにしても危なすぎる。僕だったから良

かったものの、怪しい人物だったらどうするつもりなんだろうか。その所を言及した方が良いかもしれない。だが、

「すごーい！ お空を飛んでる！ おじちゃんも鳥さんだったの？」

「あんまり喋るな、舌を噛むぞ？」

今はやめておこう。無邪気に楽しむ子供を邪魔するのは大人としてどうかと思うから。

鋼鉄の博愛主義者—2

空をかける青い軌跡を見る。今まで一度も見たことのないそれを、初めは14基のサーヴァントのうちのどれかがやった物だと思った。だが、記憶にある誰とも当てはまらない。強いて言うなら、キャスターのどちらかだろうが……

空をかける青い軌跡を見る。

たとえあれが何であろうと、報告しなければ。我らがマスターに。

やはりと言うべきか、僕が目覚めた場所からアーリンの町はさほど遠い訳では無いらしく、移動を開始してからももの数分でたどり着くことができた。木造建築が並ぶ、古き良き町並だ。僕はスーツを解除して、アーリンの後を追うように街の中に入ってきた。

「す……かった……あしたまた乗せてね！」

アーリンは無邪気にそう言ったが、正直言つて僕の頭の中は別の事で一杯になっていた。ズバリ言うと、今日彼女の家に泊まる事ができるかどうかだ。今が一体いつなのかは、F・R・Y・D・A・Yが調べてくれている。それよりも目先の問題の方が僕に

とつては重要なのだ。

野宿は出来る限り避けたいが、最悪そうなる事を覚悟しておかなければならない。クソ、こうなるんだつたら少しだけでも現金を持ち歩いておくべきだった。カードならあるが、今見ている街並みには、とてもではないがカードを使える店があるとは思えない。

「ほらー、こつちだよー」

僕の思考を遮るかのように、アーリンは僕の手を引いてどんどん進んでいく。僕は彼女に導かれながら歩いたが、その間至る所から刺さつて来る視線が気になった。横目でチラリと見てみると、建物の影や家の中から物珍しげに僕の事を見ている人が沢山いるではないか。

そんなに余所者が珍しいのだろうか。確かにこの町は観光都市には見えないが、ここまでジロジロ見るほどには珍しくはないはずだ。

と、そんな事を考えていたらいつの間にか目的地に到着していたらしい。

アーリンがここだよ！　と言つて指差した家は、この町にある他の家と同じような、木造の2階建の一軒家だった。

「ただいまー！」

アーリンは勢いよくドアを開け、駆け足で家の中に入っていく。奥の部屋からは今日は早かったのね、と優しい女性の声が聞こえてきた。彼女の母親だろうか。僕も中に

入っていいのか分からず手持ち無沙汰に待っていると、アーリンが母親を連れて玄関までやってきた。出てきた女性はなんとというか、少々古い服に身を包んでいた。あまり裕福でないのか？ いや、思い返せば彼女だけでなくアーリンや町にいた人達も似たような服を着ていた。やはり僕の仮説通り、この時代は僕が生きた時代とは違うのかもしれない。

タイムスリップならば経験した事がある。今回のこれピム粒子の暴走だろうか。だとすると少々面倒だ。

「このおじちゃんが、さっきママに話したおじちゃんだよー」

と、アーリンが母親に僕を紹介した。アーリンの母親は、何が珍しいのか僕の事を足先から頭まで舐めるように見ると、すつと身を引いた。さて、歓迎されるか、排斥されるか……

「お疲れでしょうから、どうぞ中へ。もうすぐ旦那が帰ってきますので、そしたら夕ご飯を食べましょう。寢床は空き部屋がありますのでそこで」

予想に反して猛烈に歓迎された。いや、それにしても歓迎されすぎだ。何も言わずに夕食を用意してくれるのだ？ しかも寢床も？ 僕にとつて都合のいい展開すぎて、異ではないかと警戒する。一体誰が仕掛けたのかと聞かれても答えられないが。

「ちよつと待て、なぜそんなに親切にしてくれる。僕は、あー、自分で言うのもなんだが

かなり怪しい。こんな男をひよいひよい家にあげていいのか？」

アーリンの母親は何故か哀れむような目で僕を見て、こう続けた。

「アーリンから聞きました。東の草原で倒れていたんですよね？」

「……ああ、そうだよ」

「でしたら今は何も聞きません。今日はゆつくり疲れを癒してください」

……疑問点は未だ多いが、とりあえず家にかかることにした。家の中で詳しい話を聞けばいいだろうと思つたからだ。

結論から言うと、その考えは甘かつた。なぜかこの家族が僕の事を避けるのだ。初めは質問責めをしてきたアーリンも、母親が止めた事によって何も聞きに来なくなつた。父親が帰つてきてもそれは同じだ。

夕食に出た野菜のスープは美味しかったが、その美味しさが薄れる程度には重い雰囲気だつた。

夕食後、アーリンの母親は半ば押し込めるように僕を寢室へと案内した。

一人になつた寢室でベットに寝転ぶが、一向に眠れる気がしない。というか、寝る気がない。

「F. R. Y. D. A. Y.」

《はい、ボス》

「あの二人の会話を聞きたい。音声を拾ってくれ」

《了解しました》

聞こえて来た会話は、正直に言えば想像もしていないものだった。僕はつきり、僕が誰なのかを話していると思っていたのだが……

『あの人、東の草原に倒れてたつて言ってたな。かわいそうに』

『ええ、きつと隣町の生き残りよ。運良くサーヴァントの目を掻い潜ったんだわ』

『一体どれ程の地獄を見たのか……想像もできないな』

『彼、この後行くあてがあるのかしら？』

『分からない。詳しい事情は、明日彼が起きてから聞こう。今日は、休ませてやろう』

『ええ、そうね』

どうやら僕の正体は、あの二人の間では確定しているらしい。

二人の話を纏めるところだ。サーヴァントとやらに襲撃された隣町から逃げて来た男、それが僕。全く、訳がわからない。

そもそも、サーヴァントとはなんだ。アーリンの話からつきり子を戒めるための偶像だと思っていたが、二人の話を聞いてからその考えは百八十度変わった。

実在し、実際に人を殺す存在。

分からない事が多すぎて、頭が混乱してくる。とにかく、明日僕の身に、隣町から逃

げて来た男の身に何があったのか聞かれても困るので、その対処法を考える事にした。

「でつち上げるか？ いや、それでもいいが細かい事を聞かれるとマズイ。なら、あー」
 《なんでもいいのですが、ボス。少々声が大きすぎるかと》

「ああ、わかった。少し声のポリユームを落とす事にしよう」

あの二人に隣の知り合いがいたとして、同じ町に住んでいる人物がそれを知らないのは不自然な事なのだろうか。少なくとも、僕の時代ではそれは自然な事だが、ここでは分からない。だがもし、地域の絆が強い文化だったのならそれは不自然だ。となると、やはりでつち上げるのは悪手だろう。

「なあF. R. Y. D. A. Y.。心の旅路を見たことあるか？」

《あー、なるほど。いい案だと思います》

案の方針が決まった。なら後は設定のすり合わせだな。

◆◆◆◆◆

「おきて！ 朝だよ！ おきて！ おきてつたら！ なんでまたおめめ閉じちやうの！」

アーリンによって叩き起こされた僕は、洗面台で顔を洗ってからリビングへと向かった。何、基本的な方針は決めてあるのだ。これといってビクつくことはない。

演技の経験はないのが少々不安な所だが、まあ何とかなるだろう。

「おはようございます。昨夜は休めましたか？」

リビングへと入った僕に、アーリンの母親はそう問いてきた。

「ゆつくりと休む事ができましたよ。本当に有難い。ああそれと、昨晚言い忘れてたんですが……あの野菜のスープ、本当に美味しかった」

「口にあつたなら良かったです。朝ご飯にもあのスープが出ますので、宜しかったらそちらも」

「そんな、朝ご飯まで頂くなんて」

「別に大丈夫ですよ、二人分も三人分も大して変わりません」

「なら、頂きましょう」

もう既に旦那の方は仕事に行っているようで、朝食卓を囲んでいたのは、僕とアーリン、そして彼女の母親の三人だった。

さて、僕の予想だともうそろそろのはずなんだが……

「あの、もし良かったらなんですけど、一体何があつたのか教えてくれませんか？」

そら来た。面に出さず、唾を飲む。僕は、昨夜に決めていた台詞を口から出した。

「それが、あいにく殆ど何も覚えていなくて。ナイフやフォークの使い方なら覚えてるんですが……」

「覚えてない、ですか。本当に些細な事でも構わないので、何かないですか？」

ふと引かかった。僕が目覚める前は、一体どんな風だったのだろうか。草原ではなく、僕自身の方。

ストレンジが穴を開けて、ピーターが帰ってきて、消滅した人々も戻ってきて。

そうだ、僕はサノスと戦っていたのだ。

その結果は、サノスとの決戦の結果は一体どうなった。

ダメだ、頭に靄がかかったように思い出す事が出来ない。

僕は……

「……じちゃん？」

アーリンの呼びかけで僕の意識は再び食卓に戻った。いけない、ここでボロを出す訳にはいかないのだ。意識を逸らしたらダメだろう、僕。

「すみません、少し不謹慎でした……」

「大丈夫ですよ、このくらい」

「いえ、知り合いが隣町にいたもので……すみません」

彼女がこうまでなるほどに、僕の表情は酷かったのだろうか？ だとしたら反省しなくては。今は、目の前の彼女に違和感を持たせない事が重要なことから。

再び会話を始めようと、僕が口を開いた丁度その時。

外で爆音の声が鳴り響いた。

「この村の全住民に告ぐ！ 昨夜怪しげな飛行物体がこの村に入ったとの報告があつた！ 今この村にいる者は、即座に外に出ろ！」

鋼鉄の博愛主義者―3

数秒間の間、沈黙が食卓を支配した。

「なあ、今のなんだが……」

「ごめんなさい、話は後で。……今は、中に隠れておいてください……」

そう言ったアーリンの母親は、どこか焦った様子でアーリンを連れて外に出て行ってしまった。

全く、一体今の声はなんだ？ なぜ彼女達は焦って外に出て行つた？

その疑問を解消すべく、僕は窓へと近づき気配を殺しながら外を見た。集まった住人達で隠れてしまつてよく見えないが、どうやら中央に声の主がいるらしい。

どうにかして見れないかと目を凝らしていると、住人達の間から少しだけ声の主の姿を見ることが出来た。そして……自分の目を疑つた。

見る事の出来たのは一瞬だったので、本当に僕の見間違いかも知れない。出来る事ならば、見間違いだという事を信じたい。

住人達の中央にいたのは、白と青の甲冑を身に纏つた騎士だったのだ。周りの住人達の様子から察するに、中世の騎士のコスプレをしただけの人間ではない事は確かだ。

だがそれはおかしい。

保安官や開拓者ならまだ分かるが、中世の騎士だ。

ここはアメリカだぞ？

まあ、何にしろ僕はこの場から動くことができない。

できれば穩便に行つてほしいが……

窓を少しだけ開けて、外の声を聞く。さて、一体なにを話しているのか……

「先程言つた通り、昨夜この村にナニカが侵入したとの知らせがあつた。それが一体何であれ、マスターはその存在を把握していない。早急に差し出せ」

なるほど、つまりは僕か。

奴の言うマスター、恐らくはサーヴァント、使用人の雇い主だろう。と言うことは、彼がサーヴァントか？

確かにあの甲冑と剣は恐ろしいとは思うが、なぜだろう。どこか腑に落ちない。

と、少し考え事をしてしているとどうやら事態が進展したようで、外から何やら声が聞こえてきた。

「……誰も名乗り出ないか。ならば、その女。前に出る」

と言うと、甲冑の男は誰かを指名して自らの前に出てこさせる。

一体何をするつもりなのか、それはすぐに分かつた。その行動は、考えうる限りの最

悪に近いようなものだった。

「あと十秒以内にソレを差し出さないと、この女を殺す」

甲冑の男が殺すと言ったのは、見たことのない女性だ。きつと、この村に住んでいる誰かなのだろう。

奴の気配から、これがジョークではない事が分かった。にも関わらず、騎士が実際に剣を振り上げいつでも女におろせる姿勢で固まっているのに、女は一つも抵抗しない。一体なぜ彼女は抵抗しない。

それは決して自分を殺す事は無いという安心感からか、それとも抵抗したところで何も変わらないという諦めからか。

そんな最中でも、騎士は数を数え始める。

「十、九」

呼び出された女性は固く目をつぶってその瞬間を待っていた。

諦めて、いるのか。彼女は。

「八、七」

周りで見ている連中も何も言わずに黙っている。

なぜアーリンは名乗り出ないんだ。出会ったばかりの僕の為に、古くから知っている人を犠牲にするのか？

「六、五」

甲冑の男の手に力が入り始める。

僕は左手だけにスーツを纏い……

「四、さ」

「少しばかり数を数えるスピードが早いんじゃないか？」

外へと出ていった。いや、ドアを開けそのドアにもたれかかったの方が正しいか。

開いたドアにもたれかかりながらそう言った僕は、左手を隠しながらゆつくりと歩いて甲冑の男のもとへと近づいた。

「なんだ、お前は」

「そうだな。天才、金持ち……は今ちょっと違うか。にプレイボーイ、博愛主義者。後は、謎の飛行物体」

近づいてみて初めて分かった事が二つ。

一つは、甲冑の騎士が一人ではなかった事。目で見えるだけで、二人はいる。

それともう一つが、彼らがここに来た方法だ。

騎士達の後方、距離にして約十メートルの位置に、羽根の生えた大蜥蜴おおとかけがいるのだ。

冷静を装ってはいるが、正直少しばかり混乱している。先程から頭の中に疑問が生まれ出てやまない。

だが、それはそれとして。僕は甲冑の男、道の中央に女性を呼び寄せた男に向かって歩いていくのだ。

「なるほど、お前が報告にあつたモノか」

そう言った男は、剣を女性に向かつて振り下ろそうとした。

すかさず左手を男に向け、攻撃する。左手に展開されたスーツから機械音が流れ、手の平から出たりパルサー波が男の胸部に当たった。リパルサーが胸の部分にあたつた男は、呻き声を上げながら後方へと吹き飛んでいく。僕は、彼が民家へと突つ込むのを横目に、胸の中央で青く光るリアクターに軽く触た。

次の瞬間、リアクターからナノマシンが展開していき瞬く間に僕の体をスーツで包みこむ。

「おいおい、別にその人が女性だからって訳じゃないが、それは酷いんじゃないか？」

耳に入ってくる自分の声が多少くぐもつた響きへと変わり、視界は外の風景を写した画面に移り変わった。それと同時に、僕の心が戦闘用へと切り替わる。

感知した敵の数は、今吹き飛ばした男を含めて二人。どうやら隠れている敵などはいなそうだ。

「貴様ツ！ 自分が何をしたのか分かっているのかッ！」

「何って、人助けだよ」

「あら、全滅してしまったのね。残念」

突如、女の声があった。

目の前の住人達からではない、かと言ってほかにいるはずもない。

だが、F・R・Y・D・A・Yが検知した。先ほどまでは確かに誰もいなかったはずの、空。そこに何者かがいるのを。

視線をそちらにやる。警戒し、いつでも反応ができる様にゆっくりと。

視線を向けた先にいたのは、漆黒のローブを纏った女だった。漆黒のローブを纏った女が、その身一つで浮かんでいた。

「まあ、彼らも最後には手柄を立てられたのだし、いいでしょう」

僕は女から目を離さなかった。

一瞬でも隙を見せれば終わる。そんな予感がしたのだ。

そして、実際にその予感は正しかった。

一瞬、ほんの一瞬だけ、女から注意を背けてしまった。

背後の住人達をどう守るか、その為に一瞬だけ。

その一瞬が命取りだった。

気がついた時には、僕は何か膝から崩れ落ちていて、意識が何かに吸い込まれる感覚に陥っていた。

「まさか新しくサーヴァントが召喚されているとは思わなかったわ。見たところマスタ―はいなさそうだから、野良ね」

僕が、サーヴァント？

なんの冗談だ、と思いいながらも僕は……………意識を手放してしまった。
そして

ふと目が覚めた時、僕は戦場にいた。

戦車が地を這い、銃弾が飛び交う、と言った戦場ではない。

雄叫びをあげた部族が宇宙の敵と戦っている。

赤いスーツに身を包んだ少年が、何かを持って移動している。

至高の魔術師が水流を止めている。

お調子者達が気楽に敵を撃っている。

そして、正義の青い英雄が、敵のリーダーと戦っている。

これは…………

そうだ、思い出した。

これは、サノスとの戦い。

……ア^エベンジ^ンャー^ドズ^ゲの^イ終^ワわり^ムだ。

鋼鉄の博愛主義者—4

僕は、何故ここにいる。

僕は確かに、アーリンの村にいた。戦いこそしていたが、この戦場には確実にいない。僕はタイムマシンを使っていないぞ？　そもそもピム粒子がないのであったとしても使えないのだが。

思考を巡らせていると、僕の体が、目が勝手に動き何かを捉えた。

視線の先にいるのは、水流を渦が巻くようにして静止させているストレンジ。そして、自らの右腕を訝しげに見ているサノス。

いったい今は、どう言う状況だ。戦いは、どうなっている。負けたのか？　それとも、1400万605分の1を、勝ち取ったのか？

ズキリと、頭が痛んだ。

そうだ、やらなくては行けないことがある。

突如として、右半身が焼かれるような引き裂かれるような、否、言葉では到底言い表す事など不可能である程の苦痛に襲われた。

これは、マズイ。即座に何か対処をしなくては。

けれども体は何もしようとせず、勝手に右手を掲げ……指を鳴らした。

その瞬間、今までのとは比べものにならない程の痛み、そして苦しみが右手を中心に発生した。

体の全てが、骨が、肉が、臓器が、細胞が、壊れていくのが分かる。

いつたい、何、が……

そして、瞬きをして、目が開いた時には、僕は再び水流を止めているストレンジと、自らの右腕を訝しげに見ているサノスを捉えていた。

なんだ、これは。何が、起こって、いる。

「お、おじちゃん！」

「止まちなさいアーリン！」

私達の為に戦ってくれたあの方が倒れた次の瞬間、私の娘、アーリンはあの方へ向かって駆け出していた。私の制止の声など聞かずに、サーヴァントなど意にも介さずに。

このままではアーリンが殺されてしまうかもしれない。それなのにも関わらず、なんで私の足は動いてくれないの。

隣町の惨状を知っているから？　だから、自分の身が可愛くて動いてくれないの？

「あら、可愛らしい子。どうしたの？」

「お、おじちゃんに何したの？」

アーリンは、震えながらそう言った。サーヴァントに向かって、目を逸らさず睨みつけながら。

お願い……ここに戻って、その方なんて放っておいて。

けれど私の思いは虚しく、アーリンはあの方とサーヴァントとの間に立ち続けた。周りの人は、私も含めて全員、何もせずにアーリンをじつと見ていた。

「そうね、それを言う必要はあるかしら？」

「あるもん……おじちゃんは、私を乗せてお空をいっしょに飛んでくれたんだもん……」
「なんで、そんな昨日今日会ったばかりの人の為に頑張れるの？」

「なんで、その為だけに私の愛しい娘は命を投げ出そうとしているの？」

「ふふ、可愛らしい子」

そう言うのとサーヴァントは、先端に三日月型の穴が空いた円盤をつけた杖をアーリンに向け……

「でも、教える事は出来ないわ。だってあなた達はみんな死んでしまうのですも……あら」

遂に、私の体は動いてくれた。アーリンとサーヴァントの間に割って入ろうと、足が駆け出してくれた。

アーリンを救えるなら、私はどうなったっていい。そう、思えた。

私は、サーヴァントが何かをする前にアーリンとサーヴァントの間に入れたのだ。

「どうか娘は、娘だけは、殺させないでください……」

サーヴァントの杖の先に、紫色の模様が浮かび出る。

その模様が、輝きだす。

私の懇願は受け入れてくれるのだろうか。それを信じるしか、道はないのだけれど。

私はアーリンを背中に守りながら、硬く目をつぶって覚悟を決めた。

どうかアーリンだけは……

一体何度繰り返しただろうか。

一体何度、この苦痛を味わったのだろうか。

なのにも関わらず、この体は行動を止めようとしなない。変わらず指を、鳴らし続ける。

だが、今回は違った。僕自身の意思で、体を動かすことができた。

逃げてしまえと、僕の中の何かが言う。もう、あんな苦痛はうんざりだ、と。

僕はその声に……従わなかった。

この行動が何をもたらすのか思い出すことはできない。なぜこのような状況になっているのかも。

それでも、一つだけ確信できることがあった。

それは、この行動が何かを救うであろう、という事。

それだけを信じ、今度は自らの意思で指を鳴らした。

パチン

今回は、再び初めに戻る事はなかった。

その代わり、体の感覚は、消え失せてしまったが。

そして、少し意識が飛んだ。気がついた時にはサノスとその軍勢は消え去り、僕はど

こかに横たわっていた。

ああそうだ。全て思い出した。

僕は、ガントレットを使用して、この戦いに終止符を打とうとしたのだ。その代償として、命を支払う事となってしまうが。

ぼやける視界の中、ローデイがやってくるのが分かった。

そしてピーターに、ペッパ。

お疲れ様。

ああ、確かに、少しだけ疲れたかもな。

勝ったよ、スタークさん。

そうか、僕は、僕達は、アベンジャーズは、サノスに勝ったのか。それだけが、ずっと気掛かりだった。それならやつと……

ゆっくり眠って。

そうだなペツパー。ゆっくり、眠れる……

……いや、待て。僕はまだやるべきことがある。

サーヴァントを、倒さなければ。モーガンと同じくらいの歳の少女の為にも、温かく美味しいスープをくれたあの家族の為にも。

そして、僕自身の為にも。

体が戻ってきた。スツと立ち上がる。

破損していたスーツはいつのまにか全て修復され、傷ついていたはずの体は万全の状態へと戻っていた。

リパルサーを使い、空を駆ける。

一瞬にして小さくなった戦場を見下ろすと、ペツパーと目があつた気がした。

貴方を止めようとした事が、私の一番の過ちよ

ふと、タイムトラベルをする前に彼女に言われた言葉が聞こえてきた。それは、きつと『いつてらっしゃい』の代わりなのだろう。

僕はもう、この世界での役目は終わったのだと悟った。

「じゃあ、行つてくるよ」

僕はそう一言呟くと、上へと向かった。

上に、さらに上に。

意識を、浮上させるんだ。

「どうか娘は、娘だけは、殺さないでください……」

目を覚ますと、もうストレンジやサノスの姿は無かった。

そのかわりに、僕を守るようにして立っているアーリン、その彼女を守ろうと前に立つ母親の姿があった。

なるほど、状況はあまり良くないらしい。

敵の杖の先に紫色の魔法陣が一瞬にして展開されていく。

こいつも魔術師か？

だが、そんな事は今は関係ない。とにかく、アレを発動させてはまずい。そう判断した僕は、背中からリパルサーを発射して瞬時に起き上がり、敵に向かって生成したブレードを飛ばす。

ブレードはまっすぐと敵に向かって飛んでいくも、敵が即座に上空へと退避し、後ろ

にあつた民家へと衝突した。

クソ、新しく建てたばかりなのに、とぼやくサングラスをかけた老人を横目に、僕は敵を見据えた。

「……何故すぐに動けるの。自らの死の記憶を何度も繰り返したのでしよう？ 名だたる英雄達ですら動けるようになるまである程度の時間が必要だったというのに」

「さあ？ もしかしたら僕は死の女神に嫌われてるのかも」

僕は、空へと飛んで奴と戦おうと

「おじちゃん……」

したところでアーリンに話しかけられた。声から察するに、本当に心配だったのだらう。

僕は子機を出して敵の攻撃を防ぐ準備をした後、アーリンの頭に手を乗せた。

「大丈夫だよ」

「ほんとに？」

僕が大丈夫だと言っても、アーリンはまだ心配そうだった。

僕はアーリンの頭を軽く撫でると、手を離れた。

「ああ、何故なら」

僕はアーリンを見つめながら、少しばかり宙に浮いた。

そして……

「私はアイアンマンだ」

再び敵を見据え、上昇する。

さあ、反撃の始まりだ。